

研究者としての土台を築かせて いただいた研究所での日々

曾根秀一 / 静岡文化芸術大学 教授

経済経営研究所は私にとって、研究者としての基盤を築いていただいた貴重な場所です。博士後期課程在学中アルバイトをさせていただき、研究所内の資料整理やデータ入力、蔵書管理等、本や研究が好きな私にとって、100年を優に超える史料から最新の国内外の論文に至るまでかかわることができ、まさに「宝の山」でした。このため、作業が早く終わった際は、片っ端から読んでいきました。1階の図書館から階段を上る足音、古書の匂いも感じながら常に研究についてアイデアを巡らせた日々を懐かしく感じます。また、大学院院生会では会長を務めさせていただき、院生の紀要『びわ湖経済論集』の発刊の際には研究所から毎回ご支援賜りました。2009年にびわ湖ホール(大津市)で開催された「朝日・大学パートナーシップシンポジウム」において「近江商人に学ぶ-危機に克つ「三方よし」-」と題して、一緒に働いた博士前期課程の王蓓莉さんと共に総合司会を務め、基調講演された丹羽宇一郎氏(当時伊藤忠商事株式会社社長)に緊張しながらもインタビューしたことが思い出されます。

その時、あらためて思ったのは、滋賀大学経済学部の伝統かつ歴史の深さであり、近江商人はもちろん、満州関連、経済経営系の長年蓄積されてきた史料、そしてわが国随一ともいえる社史の豊富さは誇りでもありました。私自身は、経営戦略論、企業史などの視点から「企業の存続と衰退」をテーマに研究を続けてきた関係で、特に研究所の社史から多くの学びを得ました。このため、現在も直接、滋賀大学にことあるごとに赴いています。

また、戦前からの卒業論文も多く残され、経済学、商学(経営学)を通じた事例や理論の展開等々、当時の学生がどのような研究課題に向き合っていたのかなど大変興味深く、印象に残っています。自身の研究調査で彦根市内の老舗関係者に話をうかがった際のこと、滋賀大学に終戦直後入学されたという傘寿を迎えた方に出会いました。滋賀大学で学ぶ院生だと知ると、当時の様子を懐かしそうに話して下さいました。入学が終戦直後のため、戦地から戻ってきた数歳上の学生も一緒に入学し、戦地を経験していない学生とは一線を画す雰囲気があったこと、卒

業論文を一生懸命書かれたことなど、キャンパスでの学びを楽しそうに述懐される姿は眩しくも感じました。同窓生のたくさんの想いと誇りが詰まった大学、図書館、そして研究所であることを感じました。

また、何より至福の時間は、カウンターにいと学内の教職員だけでなく外部の研究者と話せる機会があることです。毎週のように東京大学など学外の研究者の方々がこられ、本学の歴史的な文献所蔵数の多さについて述べられていました。学内の先生方とは、授業とはまた違った研究上の助言を下さるなど、研究で苦悩している時期も元気をいただきました。大きな学会でのデビュー戦に、司会を務めた先生から厳しい批評を受けたことがありました。「このままこの研究でよいのだろうか」と暗い気持ちになっていた時に、経営史の宇佐美英機先生がカウンターにこられ、声を掛けて下さいました。「学会で吊り上げられたことを他の先生から聞いた。若い院生を皆の前で潰すようなことをしてはいけないし、なぜ他の教員は抗議をしないんだ。もし私がその場にいたら手を挙げて抗議していた。その人より長生きして研究できるんだから頑張りなさい」と激励いただき、涙が出る想いでした。

そして何より自由な雰囲気や働く場を提供して下さいましたのが、助手の江竜美子さんをはじめ所員の皆様でした。特に江竜さんからは本学の教授だったお父様の話や研究所の史料の裏話、たくさんの気配りもいただき、彦根で一人暮らしをしていた私にとってお姉さんのような存在でした。また凛とした姿に憧れさえもちました。これは共に働いた廖美華さん(現在、台湾・亞洲大學助理教授)や前述の王さんも同じことを述べていました。研究会にも誘っていただき彦根の町並みも知り、より彦根のファンになりました。もし、研究室に籠っていたなら滋賀大学や彦根への想いはだいぶ変わっていたように思います。

研究所で働かせていただいた日々を胸に精進を重ねてまいります。これからは滋賀大学はじめ研究所の益々の発展を心より願っております。あらためまして大変ありがとうございました。